

独孤及の文学について

劉, 三富
西南学院大学文学部 : 講師

<https://doi.org/10.15017/9796>

出版情報 : 中国文学論集. 5, pp.15-22, 1976-03-25. 九州大学中国文学会
バージョン :
権利関係 :

独孤及の文学について

劉 三 富

唐代も盛唐期に入って、文章の趨勢は漸く駢文から古文へ移行変質しつつあったが、その古文作家の代表者として、張説・李華・蕭穎士・元結・独孤及・梁肅等を挙けることができる。本論文では、その中の一人でありながら従来さほど深く研究されていなかった独孤及をとりあげ、古文家としての彼の独自の創作理念とその注目すべき表現構造の性格について、私なりに考察を加えてみようと思う。はじめに参考までに、従来の文献に見える、独孤及文学に対する主要な評価を挙げて置こう。

まず「旧唐書」の韓愈伝は、

大歴貞元之間、文字多尚古学、效揚雄董仲舒之述作、而独孤及梁肅最稱淵奥、儒林推重（大歴貞元の頃、詩文は多く古代の文風を尊重し、揚雄・董仲舒の述作を模倣した。そして独孤及・梁肅の文は、最もふかみがあると称せられ、学者文人の間で重んじられた）

と記している。また、独孤及と同時代の権徳輿は、「立言遺辞、有古風格」¹⁾独孤及は、文辞に表現する際、古風格がある」と評価している。

さらに、清の趙翼に至っては「二十二史劄記」卷二〇の中

韓愈之先、早有以古文名家者、今独孤及文集尚行於世、已變駢体以為散文、其勝処、有先秦兩漢之遺風（韓愈以前に、すでに古文でもって名高い者がいた。現在も独孤及の文集は、相変らず世間で読まれているが、その文章は、すでに駢文体を變じて散文体にしてしまっており、その文章のすぐれた個所は、先秦や漢代の文風をそなえている）

と賞賛している。このような前人の評価をみても、独孤及が、唐代散文發展の過程において、かなり重要な位置を占めている作家であることがわかるであろう。

さて、「唐書」本伝に依ると、独孤及は五十三才で亡くなつたと記しているのみで、その具体的な生卒年代には全く言及していない。そのために彼の生卒年については従来から諸説紛々たるものがある。しかしながら、今最も信憑性のある発言として、独孤及と同時代の人たちの記述を挙げれば、

(1) 大歴丁巳歲、夏四月、有唐文宗常州刺史独孤公薨于位。

（「毘陵集」卷三〇載梁肅「唐故常州刺史独孤公毘陵集後序」）

(2) 嗚呼痛乎、奄忽捐館。其時也、大歴十二年夏四月二十九日。其地也、常州之路寝。其寿也、五十三年。（「全唐文」）

卷四〇九載崔祐甫「故常州刺史独孤公神道碑銘」序

(3) 維大歷十二年歲次月日、外從祖舅朝散大夫樞知中書舍人賜紫金魚袋崔祐甫、遺表妹前、鄧州南陽縣尉李綜、以清酌之奠、祭於從外孫甥常州独孤使君至之靈。(同上、載崔祐甫「祭独孤常州文」)

(4) 嗚呼、公庇斯人、人方仰公、彼天不惠、降此大厲、為郡之四載、大歷十二年四月壬寅晦、暴疾薨於位。行路慟哭罷市者相弔踰月、又吁嗟之聲、相聞自寮屬相吏、下逮鄉老里尹、皆率以備齋祭。(「唐書」卷五三載梁肅「独孤公行狀」)

等の諸文がある。これによれば、独孤及は、明らかに開元十三年(七七五)に生まれ、大歷十二年(七七七)に五十三歳で亡くなったことになる。つまり、独孤及の生きた時代は、開元年間から大歷年間の間であって、時期的には、詩人の杜甫(七二七—七〇)が生きていた頃とほとんど重なり合っている。

独孤及の文集である「毘陵集」二〇巻は、もともと彼の弟子に当る梁肅が編纂したものであるが、「四庫全書総目提要」巻一五〇集部別集類三によれば、この梁肅編本はつとに亡佚し、現在われわれの見る「毘陵集」は、明時代の呉寛が、すでに散佚していたものを再編集して世に出したものであるといわれている。

独孤及は、それほど名門の出身ではなく、官位も常州刺史で終っている。李肇が、「唐国史補」の中で、当時官位は低いけれども、才能と德行によって世に名を知られていた文学者や芸術家のなかの一人として独孤及をあげているのも、そのためであらう。

開元後、位卑而名著者、李北海・王江寧・李館陶・鄭広文・元魯山・蕭功曹・張長史・独孤常州・杜工部・崔比部・梁補闕・韋蘇州也。(「唐国史補」巻之下八)

この記述のなかで、注目すべきことは、李邕・鄭虔・元徳秀・蕭穎士・崔元翰・梁肅など盛唐の末期から中唐にかけて出現した多くの古文家が含まれていることである。なぜなら独孤及とこれらの古文家とは、次における幾つかの資料によって理解できるように、極めて密接な関係にあるからである。

先ず、李華と蕭穎士は、共に孫逖に拔擢され、開元二十三年に進士科に及第している。と同時に、この李華と蕭穎士は、いずれも元徳秀に師事したことで共通の友人となる。その関係で、李華の弟子であった独孤及は、韓雲卿・韓会とともに蕭穎士の古文家たちとも、つながりを持つようになり、ここに、一つの大きな古文家の文学集団を形成していたと考えられる。いうまでもないが、韓雲卿は韓愈の叔父に当り、韓会は韓愈の兄に当り、韓会の育て親でもある。特に、李華は士人を推奨することを好み、「唐書」の李華伝によれば、独孤及・韓雲卿・韓会・李紆・柳識・崔祐甫・皇甫冉・謝良弼・朱巨川ら幾多の俊秀は、李華の推挙によって後にいずれも執政の顯官となることのできたという。

蕭穎士もまた「唐書」本伝に、

穎士業聞人善、以推引後進為己任、如李陽・李幼卿・皇甫冉・陸渭等數十人、由奨目、皆為名士。天下推知人、稱功曹(巻二二)

とあるように、彼は後進を推奨することを自らの任となし

て、李陽・李幼卿・皇甫冉・陸渭ら數十人が蕭穎士の知遇を得て、時の名士となっている。さらに本伝を読むと彼が友と遇るところの者に顔真卿・殷寅・柳芳・陸據・李華・邵軫・趙驊らがあり、たがいその交友關係を全うしたと記している。さらに梁肅が書いた「独孤公行状」(『全唐文』卷五三三)によれば、李華・蘇源明の二者が独孤及を「詞宗」と推稱したことによって、独孤及はたちまち天下に名を広めたのである。その独孤及の弟子である梁肅が世に名を知られるようになった後、韓愈はこの梁肅の推挙によって進士科の試験に合格し、「龍虎榜」の中の一人となったことはよく知られている。のみならず蕭穎士の子蕭存、独孤及の子の独孤郁は、いずれも師弟或いは友人として、集團的關連性を持ちながら、後に古文復古運動の領袖となった韓愈に多大の影響を与えている。

このように、唐代古文運動の形成過程に、大きな位置を占めた独孤及は、一体どのような文学觀をもっていたのであろうか。これを同時代の古文家の文学觀と比較しながら、検討してみよう。

まず、独孤及の師に当たる李華の文学觀を見てみよう。即ち、李華の「贈礼部尚書孝公崔沔集序」には次のようにいっている。

文章本乎作者、而哀樂繫乎時、本乎作者、六經之志也、繫乎時者、案文武而哀幽厲也。有德之文信、無德之文詐、阜陶之歌、史克之頌、信也。子朝之告、宰嚭之詞、詐也。夫子之文章、偃・商伝焉、偃・商没而偃・軻作焉、蓋六經之遺也。屈平・宋玉哀而傷、靡而不遠、六經之道遂矣。乃後

世力足者不能知之、知之者力或不足、則文義沒以微矣。

(『李遐叔文集』卷二)

これは、李華が「崔沔集」の序において述べているもので、「有徳の文は信であり、無徳の文は詐である。皋陶の歌、史克の頌は信であり、子朝の告、宰嚭の詞は詐である。そして士君子は無徳の文を作ることを恥とする。孔子の文章は、偃や商がこれを伝え、偃や商が没して後、孔伋や孟軻が現われた。これが即ち六經の遺風である。これに反して屈原・宋玉は哀しみて傷み、靡であつて遠大ではなく、六經の道は選びてしまった」と言っている。これから考えると、李華は孔子・孟子までの文章のみを認め、孟子以後の屈原・宋玉の美文は、漢代の文章を含めて、一切認めようとしてはいない。

李華と並ぶ優れた古文家である蕭穎士の文学觀をうかがうことのできる資料として、李華の「揚州功曹蕭穎士文集序」(『李遐叔文集』卷二)を次にあげるが、そのなかで蕭穎士の文学史觀に關する発言が引用されている。

君(蕭穎士)謂六經之後、有屈原・宋玉、文甚雄壯而不能經、厥後有賈誼、文詞詳正、近於理体、枚乘・司馬相如亦瓌麗才士、然而不近風雅、揚雄用意頗深、班彪識理、張衡宏眩、曹植豐贍、王粲超逸、嵇康標舉、此外皆金相玉質、所尚或殊、不能備舉、左思詩賦、有雅頌遺風、干寶著論、近乎王化根源、此外皆絕倫無間焉。近日陳拾遺子昂、文体最正、以此而言、見君述作矣(蕭穎士が言うには、六經より後には屈原・宋玉がいる。彼らの文は非常に雄壯だが、經典たることはできない。その後は賈誼がいて、彼の文章は詳細的確で理詰めの文体に近い。枚乘・司

馬相如もまた麗漢の方士ではあるが、しかしあまり風雅ではない。揚雄は文学に對する心使いがすこぶる深淵であり、班彪は道理をこころえ、張衡は広博な作風であり、曹植は豊潤な作風であり、王粲はすばぬけており、嵇康は非凡である。このほか皆各々よいものを持っているが、尊重するものはそれぞれ異なっているので、具体的に挙げることはできない。左思の詩賦は詩經のおもむきがあり、干宝の著作は王化の根源に近い。この他の作家はみな大層見劣りがして有名なものはない。最近、拾遺の陳子昂は文体が最も端正であつて、これを基準にしようと、その文体は蕭穎士の文学作品に現われている。

これによると、蕭穎士は屈宋はじめ漢魏六朝時代の傑出した作家の文風にみられるすぐれた特長をそれぞれ「金相玉質」と評価しているものの、なかならず晋の左思・干宝、唐の陳子昂のごとく經典の趣があり、端正な文風に高い評価を与えている。

この李華・蕭穎士の文学観を見ても分るように、同じく古文家と一般的に言われていても、当時の文学に對する考え方はさまざまであつて、典型とすべき古文を厳しく六經だけに限定するものもあれば、やや幅を持たせて、後世のものでもすぐれたものは、それはそれとして価値を認めようとするなど、柔軟な立場を取るものもあつたようである。

しかし、その中でも、古文に對して最も厳しい文学的視点を持っていた当時の古文家は、私の見るところ、ほかならぬ独孤及であつたと思われる。独孤及の古文に對する考え方が、よく表われているものとしては、まず彼の「考功郎中蕭府君文集録」の序に次のようにいう。

足志者言、足言者文、情動於中而形於聲、文之微也。粲於歌頌、暢於事業、文之著也。君子修其詞、立其誠、生以比

興宏道、歿以述作垂裕、此之謂不朽。(中略)嘗謂揚馬言大而迂、屈宋詞侈而怨、沿其流者、或文質交喪、雅鄭相奪、益為之中道乎？故夫子之文章、深其致、婉而旨、直而不野、麗而不黷。(《崑陵集》卷一三)

これは、一見蕭府君の文学に對する独孤及の評価のように読み取れるけれども、實際は独孤及自身の文学に對する考え方を述べたものと受け取つてよい。この中で、彼は揚雄・司馬相如・屈原・宋玉などの文章に、否定的な評価を加え、反對に孔子の文章の文体と内容については「そのおもむきはおくぶかく、しなやかで趣旨がよく通り、素直ではあつても粗野ではなく、美麗ではあつてもなまめかしくない」と絶大な讚美を捧げている。

ついで、独孤及の「檢校尚書吏部員外郎趙郡李公中集序」の中にも、彼が李華の文章について論じた部分があるが、そこには、彼の文学に對する考え方がより具体的に顯現されてある。いまここにその部分を挙げてみよう。

志非言不行、言非文不彰。是三者相為用、亦猶涉川者假舟楫而後濟。自典謨缺、雅頌寢、世道陵夷、文亦下衰。故作者往往先文字、後比興、其風流蕩而不返、乃至有飾其辭而遺其意者、則潤色愈工、其美愈喪。乃其大壞也、僂偶章句、使枝對葉比、以八病四聲為楷準、拳拳守之、如奉法令、聞臯繇・史克之作、則呶然笑之、天下雷同、風驅雲趨、文不足言、言不足志、亦猶木蘭為舟、翠羽為楫、玩之於陸、而無涉川之用、痛乎！流俗之惑人也舊矣。

天寶中、公興蘭陵蕭茂挺、長樂賈幼幾、勃焉復起、振中古

之風、以宏文德。公之作、本乎王道、大抵以五經爲泉源、抒情性以託諷、然復有歌詠、美教化、獻讜諫、然後有賦頌、懸權衡、以辯天下公是非、然後有論議。至若記敘、編錄、銘鼎刻石之作、必採其行事以正褒貶、非夫子之旨不書、故風雅之指掃、刑政之本根、忠孝之大倫、皆見於詞。(『毘陵集』卷二三)

彼が師事した李華の創作は、王道に基づき、五經を源泉とし、情性を抒べて諷諫を託したものであり、孔子の主旨にかなわなければ記さなかったと述べている。このように、独孤及は、李華の散文精神をふまえながら、専ら孔子を尊び、五經を規範として、これを文章に祖述すべきであると主張している。

さらに、同じ「檢校尚書吏部員外郎趙郡李公中集序」資料の中で、李華は沈約の八病説を退け、对句に凝った表現や内容の乏しい駢文体をはっきりと否定している。いうまでもなく、独孤及は蕭穎士と違って、漢魏六朝以後の詩人作家の文章は、一切その価値を認めていない。そして、ただひたすら孔子に回歸し、五經を精神の基盤として、徹底的にそれを学ぶことを提唱しているのである。かかる彼の文学的主張は、当時の誰よりも純粹かつ簡明である。それだけに、非常に厳しい文学的課題を、古文家としての自己に課したものと思われる。例えば、梁肅の「祭独孤常州文」(『全唐文』卷五二二)にいう。

嘗謂肅曰、為学在勤、為文在經、勤則能深、經則可行、吾斯願言、勉子有成。又曰、文章可以假道、道德可以長保、華而不実、君子所醜(かつて、独孤及は梁肅に言った。学問をする時は勤勉であり、文を作る時は六經に則るべきである。勤勉であれば深めることができ、六經であれば行うことができる。私はここで望むくは、君

が勤勉し成功することを。また言う、文章は道によって作るべきであり、道徳は長く保つべきである。華麗であつて内容に乏しいものは、君子が恥とする所である。)

これは、独孤及が弟子の梁肅に、学問や文章を学ぶ場合、どのような態度で臨むべきかについて説いたものであるが、ここでも、しきりに文章は經典に則るべきであつて、華麗にながれて、思想内容が乏しいものは退けるように教示している。

以上のごとく終始一貫して儒教の經典をこそ創作の中軸とした独孤及の考え方は、当時における宗教の主流であつた仏教道教とどのように対応したのであるうか。この点について多少ながら念のために言及して置きたいと思う。

周知のごとく、七、八世紀の隋唐時代は、後漢以来の外來宗教である仏教が、完全に中国社会に定着した時代であり、またその黄金時代でもあつた。そして、その影響を受けて道教の研究によれば、仏教・道教を大体知識人の持つべき教養として受け入れていたようである。こういう時代の雰囲気の中で、独孤及もまた儒教の經典を基盤として人間性を守るかたわら、仏教・道教にも一応の理解を示していたと考えてよい。

独孤及の文集のなかで、仏教・道教に關係した資料をあげれば、次のようなものがある。

(1) 苦夫齊天地冥萬物、莫大於全真、專氣致柔、全真之本也。惟清惟靜、全真之中也。各然其所然、各可其所可、全真之末也。設教者三、合其道一以貫之、雖消遙與道養殊途、然性情與力命同轍、苟因其合而較其分、則子産不得不

勞於刑政、朝穆不得不逸於肆任、若矯其肆任之性以徇刑政之端、是統覺截鶴、虧其全矣。故聖人以大猷御六氣之辨、以大方合二經之旨、明応交無方、立言不一、學者宜忘言以究其體統、不可執言以滯其筌蹄、經不云乎？反者道之動、惟動而常靜、靜可以取則權足以合義、義無反經、凡養生者以木為精、以物為靈、閉其外、慎其內、迹不踐凶危之境、故兵不能容其刃、心不居馮暴之地、故武安得措其爪、苟守其精而遺其靈、故得於內而喪其外、外內無以持其分。則衛生之經悖矣。（『全唐文』卷三八四載「对洞曉元經策」）

(2) 公諱靈一、俗姓吳、広陵人也。神氣清和、方寸地靈、與太初元精合其純粹、聞思修惠、介然生知、九歲出家、三千斷結、嚴特律藏、將紹法寶、禾人文學、以誘世智、初不計身中有我、我中有身、德充報圓、緣断相滅、寶応元年冬十月十六日、終於杭州龍興寺、春秋三十有六、臨滅顧命、以香木茶毘為送終之節、門弟子虔奉遺旨、粵以是某月某日焚身於某山、起塔於某原、從拘尸城之制也。右補闕趙郡李紆、殿中丞侍御史頓邱李湯、嘗以文字言語、游公廊廡、至是相與追録遺懿、以貽塵劫、謂公貞靜直方、淵遠宏大而密識、洞鑑天倪道機、注不滿酌不竭、冲如也。自受生至於出家、貪恚不入念、哀樂不見色、自出家至於涅槃、六根不染欲界之塵、自知道至於返真、双履不踐居士之門、公之嚴持也。

公智刃先覺、法施無方、每禪誦之際、輒賦詩歌事、思入無間、興含飛動、潘阮之遺韻、江謝之闕文、公能綴之、蓋將臆合、詞林与儒墨同其波流、然後循循善誘、指以学路、由

是与天台道士潘清、広陵曹評、趙郡李華、潁川韓極、中山劉穎、襄陽朱放、頓邱李湯、南陽張繼、安定皇甫冉、范陽張南史、清河房從心、相與為塵外之友、講德味道、朗咏終日、其終篇必博之以文、約之以修、量其根之上下而投之以法味、欲使俱入、不二法流、公示教之擴門也、内張天機、外與物接、捨法無我、以虛受人、叱罵若空谷之響、止水之象、優而柔之、使自得之。其道極未始不無為也。（『毘陵集』卷九載「唐故揚州慶雲寺律師一公塔銘」并序）

(3) 尤好黄老之道、與脉藏榮衛之數、奉之以衛生之經、每餌菓煉氣、謂丹砂可学。（『毘陵集』卷一〇載「独孤不墓誌」）

(4) 嗜学好古、誦老子莊子之書、究其大略、罹於多難、未遑筮仕。（『毘陵集』卷一〇載「独孤公策六子万墓誌」）

これ等の諸資料から考える限り、独孤及は道、仏の教理に対してかなり深い関心をみせていたことがわかる。しかしそれはあくまでも儒教教理と齟齬しないかぎりの受容であって、前述のように純粹に孔子と五経を尊ぶ、独孤及の儒教精神にもとるものではなかった。

したがって独孤及の頑固なほどの嚴肅な創作態度は、一筋の太い線となつて、彼につづく梁肅及び韓愈に影響を与え、受けつがれて行くことになつたのである。

ところで独孤及は、ただにこのような文学理念を持っていただけでなく、さらに実際に古文家になつていく、その文学理念を具体的に実践する行動にでている。

彼が文学理念を具体的に実践行動に表わしたものとして、最も注目にあたいするものは、彼が古文家としての存在をかけた

て、朝廷に奉った「直諫表」であろう。

伏見陛下屢發德音、招延獻納、使左右侍臣、得直言極諫。忠謇者無不聽、狂許者無不容。又辛丑詔書、詔裴冕・崔渙等十有三人、並集賢殿待制、以備詢事考言之問。此五常之盛德也、而臣以目覩、生則幸矣。

然頃者陛下雖容其直、而不録其言、進匭上封者、大抵皆事寢不報、書留不下。但有容諫之名、竟無聽諫之實、遂使諫者稍稍自引、鉗口就列、飽食偷安、相招為祿仕。此忠鯁之士所以竊歎、而臣亦恥之。十室之邑、必有忠信如孔丘者、況以朝廷之大、卿大夫之衆、而陛下選受之精與？假令不能如文王之多士、堯舜之比屋、其中豈不有温故知新、可使懋陳政要、而億者屢中者乎？陛下唯虛存其儀、令條奏不眩、及議政之際、曾不採其一說、堯之疇咨、禹之昌言、豈若是耶？昔堯設謗木於五達之衢。孔子亦曰、「以能問於不能、以多問於寡。」又曰、「某幸也、苟有過、人必知之。」然則「多聞闕疑」、「不恥下問」聖人之心也。臣不勝大願、願陛下試以堯孔之心為心、日降清問、啓其宏說、不可則罷之、可者議之於朝、與執事者共之、使知之必言、言之必行、行之必恭、則君臣無私論、朝廷無私政、天下無私是。陛下以此辨可否於獻替、而建太平之階可也、況國体乎？

【毘陵集】卷四

これは、独孤及が諫官の役目である左拾遺の職にあった時に、皇帝代宗に上奏したもので、「唐書」本伝にも、全文掲載されている作品である。この上奏文の中で、独孤及は皇帝を諫めても、それが聞き入れられない実情をふまえて、孔子の心を

心とした聖人の出現を待望するという儒教理念を高く掲げている。それはそれとして、ここでとりわけ重要なことは、儒教理念を高く掲げるとともに、独孤及が従来駢儷文で書かねばならぬ常則を破って上奏文を古文体で書いたことにある。なぜならば、上奏文を古文で書いたことが、中国散文史上にあって、まさしく画期的な出来事であったからである。この「直諫表」の文体は、四六のリズムを避け、しかも典故をほとんどふまえていないこと、また時に対句を用いてはいるが、全体として古文の形式にならなっている文体で表現されていることである。もっとも、独孤及の散文は、まだ時代が早かったために、表現技巧の面からみると、なお後の韓愈・柳宗元のような闊達自在な古文表現の水準には未だ遠く及ばない。しかしながら、彼が古文家としての創作理念を貫くために、自己の命運をかけて、朝廷に挑戦している姿が、ここに強く感じられる。事実、独孤及は「唐書」本伝にあるように、この上奏文を奉った後、にわかに太常博士に左遷されて、左拾遺の職を失っている。

このように、独孤及が上奏文に表現した儒教理念に基づく主張と文体行動は、朝廷においては納れられず、取りあげられることはなかったが、彼が古文体で「直諫表」を作成し、上奏しようとした行動は、古文運動の歴史上見逃すことのできない重大な意義を持つものと考えることができるのである。

(一九七五・二一・一五)

註

(1) 「権載之文集」卷二九載「独孤公諫議」。

(2) 遂改考功員外郎、取顔真卿・李華・蕭穎士・趙驥等、皆海內有名士。(「唐

書」卷二〇二孫述伝)。

(3) 李華兄弟德秀而友蕭穎士劉迅(『唐書』卷一九九德秀伝)。

(4) 神田喜一郎氏の「梁蕭年譜」(『東方学会創立二十五年記念東方学論集』)を参照。

(5) 中国人の精神生活をみため新しい使命をもって生れた中国的仏教の中で、哲学仏教としては、三論宗・法相宗・華嚴宗などが勃興し、また実践仏教としては、浄土・禪などがおこった隋唐時代は、まさしく仏教の黄金時代であり、外来宗教の仏教が、中国社会に定着した時代であった。このように隆盛となった仏教の影響を受けて、道教に教理学が形成されたり、儒教に新しい生命を吹きこむことが可能となり、宋学成立の思想的背景を醸成することができた。このことが、隋唐時代の三教関係のなかで、思想的にはもっとも重要な出来事であると思う。参照：鎌田茂雄氏「隋唐時代における儒教仏道三教と仏教の影響を中心として」(『歴史教育』一七一三)

(6) 藤喜真澄氏の「唐代文人の宗教観」の指摘に依る。(『歴史教育』一七一三)

執筆者紹介

由元	由美子	九州大学大学院博士課程
劉三富	三富	西南学院大学文学部講師
阿部泰記	泰記	九州大学文学部助手
竹村則行	則行	九州大学大学院修士課程
麦生登美江	登美江	福岡女子大学教授
秋吉久紀夫	久紀夫	九州大学文学部教授
岡村繁	繁	